

第五十五回日蓮宗保育研修身延山大会

— 仏教福祉学科の学生の取り組みを中心に —

伊 東 久 実

はじめに

平成二十一年七月二十五日（土）、二十六日（日）の両日に、第五十五回日蓮宗保育研修身延山大会が開催された。日蓮宗保育連盟加入園の保育所保育士、幼稚園教諭を中心に全国各地から約二五〇名が参加した。

この研修大会は、日蓮宗保育連盟が主催する保育研修会であり、昭和三十年八月に第一回研修会が身延山（身延短大）で開催されて以来五十五年間毎年行われている。開催地は、日本各地に及ぶ。身延では昭和三十八年第九回大会と昭和四十三年第十四回大会、昭和四十六年第十

七回大会、昭和五十五年第二十六回大会、平成三年第三十七回大会が行われ、今回で七回目となる。

第五十五回日蓮宗保育研修身延山大会の内容については、すでに各誌（『みのぶ』、『南天』等）で報告されている。本稿では大会への学生の取り組みを中心に報告させていただく。

一、大会を迎えるまで

一日目に下部ホテルで行われる懇親会のアトラクションの内容は、日蓮宗保育連盟事務局から身延山大学に一人任された。全国各地から身延の地へお越しくださる方々

へ、本学の特色を前面に出して「ようこそ身延へ、ようこそ身延山大学へ」の気持ちをお伝えするにはどのような方法がよいかを、田沼学部長、中山学科主任、山田教授、望月法人事務局長、学生支援室一瀬さん等と前年度より話し合いを重ねた。その結果、小規模大学でなければできないこと、すなわち仏教福祉学科の学生全員が参加・協力して真心をもって歓待することに決定した。具体的には、懇親会のアトラクションとして手話ソングを披露し、同時に会場の全員がこの手話ソングに参加できるようにリードすること、また学生全員が貼り絵を施し、手作りののがきをお土産の品として用意することにした。さらに、身延山大学ならではのアトラクションとして、仏教学科の学生による雅楽の演奏を行うことにした。

① 学生とはがき作り

身延山大会を印象づける貼り絵のデザインは、今年五月に建立した身延山久遠寺の五重塔と、山梨特産品のワ

イン・ぶどうの二種類に決めた。貼り絵は、無地のはがきの右隅四分の一ほどの大きさに仕上げるため、一つ一つのパーツが複雑すぎると作業がし難い。そこでなるべくシンプルに、三角形、正方形、長方形、円、楕円形の組み合わせで五重塔やワイン・ぶどうの図柄になるようにデザインを工夫した。これらのパーツを和紙に写し取る。十色の和紙を用意し、仕上がり画一的にならないように、色の組み合わせで変化をもたせることにした。

仏教福祉学科の学生全員で、約五〇〇枚のはがきに二種類の貼り絵を施す。学生たちは資格取得のために、授業の空き時間が少ないので、一斉に作業をする時間を設けることはできない。学生が負担感なく作業を行えるように、あらかじめはがき一枚分のパーツを一セット一袋にしておいた。一人が十二枚のはがきを手作りする。学生は短い休み時間を継ぎ合わせてパーツを切り抜き、糊づけを行った。細かい作業を得意とする女子学生は積極的にノルマ以上の作業を申し出た。頑固な指の男子学生

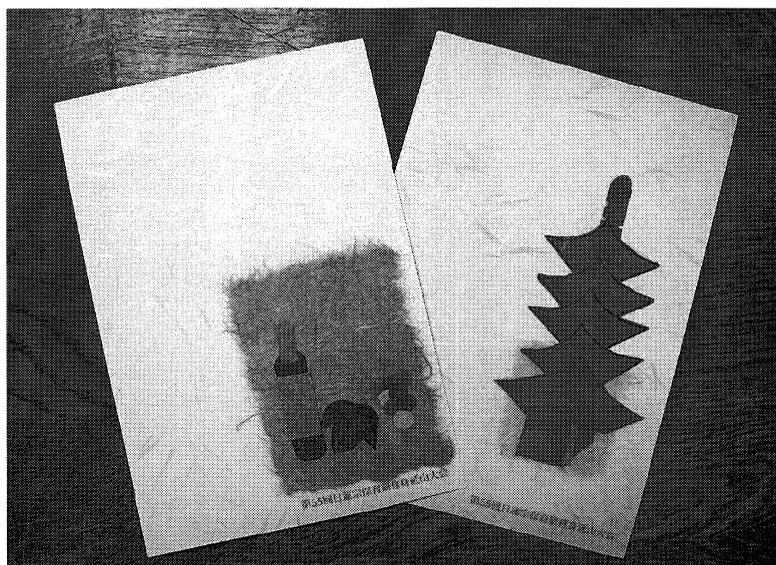


写真1 学生手作りののがき

も、器用に切り貼りを行った。

将来保育士、介護士を志す学生とあって、造形的な活動に苦手意識を持つ様子はまったく見られなかった。学生ホールで、実習棟のラウンジで、また教室の片隅ではがき作りは続けられた。

② 手話ソングの練習

懇親会のアトラクションは仏教福祉学科の学生全員で行うことになった。「ようこそ身延へ」という気持ちを表すのと同時に、学生には全国の保育者との一体感を感じてもらいたいと考えた。児童福祉に携わる人々の笑顔を肌で感じてもらい、さらには学生自身がアトラクションに出演して表現者となることで、子どもや高齢者の表現を指導する上で何が大切かを経験を通して考える機会にしてもらいたいと思った。

全体の流れを考慮して、本学の卒業生である佐治さんの紙芝居「さだ子と千羽鶴」の上演の最後に歌われる

「ヒロシマの少女の折鶴」を手話ソングにして締めくくる構成にした。この「広島少女の折鶴」の歌は、紙芝居の主人公佐々木貞子さんを想ってモンゴルで歌われている歌であるという。

これまで佐治さんは、ギター一本でこの歌を弾き語ってきていたが、学生全員が手話を交えて歌う趣旨を快く理解して下さった。ピアノ伴奏は富山講師に依頼した。そして、望月講師が歌詞を手話に下さった。

いよいよ学生が手話ソングを練習する段となったが、はがき作り同様に練習時間の確保は困難であった。手話の授業のある学年以外は、望月講師に直接指導していただけの機会はほんの一、二回に限られている。この窮地を知って、学生支援室の宇佐美さんが望月講師の演じる手話を録画したDVDを学生に一枚ずつ手渡せるように作成して下さった。これで学生は、個人の予定で自主練習をすることが可能となった。DVDを手にした学生は誰一人として負担感を表さず、安心して練習できると

嬉しそうな表情で語り、私は喜ぶと同時に心から感心させられた。

こうして始まった手話ソングの練習であるが、このときの不安感や練習の工夫を二年の土橋稔樹君は次のように記している。

私は、この「ヒロシマの少女の折鶴」を保育連盟の大会で歌と手話を発表すると聞き、驚きました。また、歌詞、手話をしっかりと覚えられるであろうか、学生全員が一丸となって成功できるであろうかといった不安がありました。

歌と手話の練習をあまりすることができませんでした。授業の中で少し時間を確保して、皆でCDを聴きながら歌詞を覚えるようにして練習をしました。しかし、男性にとっては音階が高かったので歌うことが大変でした。

手話の練習では、手話の授業の担当されている望

月香代先生に手話を教えていただきました。手や指の角度や顔の表情、左右が逆にならないように細かな部分にも注意をして覚えめました。

実際に全員で合わせる時間が少なく、DVDを観ながら授業の時に合わせて手話を覚えめました。また、友達同士で教えあいながら練習をしていました。

『南天第二十四号』

自主練習の成果は、本番二週間前の全学年を対象とした合同練習で披露しあうことになった。就職活動や卒論のため大学へ来るのは久しぶりで、この合同練習のために来たという四年生も数名いた。手話がスムーズに行えるように、三番まである歌詞を小児保健実習室の壁にプロジェクターで拡大映写してくださったのは法人事務室の池田さんであった。

各学年ごとの発表は、集まった約四十人の学生それぞれに緊張感と、お互いにひとつの目的に向かってい

第五十五回日蓮宗保育研修身延山大会（伊東）



写真2 実習棟での合同練習の様子

同士の連帯感や親近感を感じさせる時間となっていたようである。本番のために用意されたお揃いの黄色いTシャツも、一人一人に手渡された。四年生の中には自分が練習不足であることをすまなく思い、「申し訳ない、本番までに皆と同じように何度も練習して来るから」という言葉を残し帰宅する女子学生もいた。

③ 雅楽の練習

仏教学科の学生による雅楽演奏は、身延山大学ならではの演目である。日頃、学生の雅楽指導を担当されている池上教授が曲目決定、衣装、練習のすべてを一手に引き受けてくださった。仏教学科の三名の学生は、お勤めの時間をやりくりして学生ホールに集合し、龍笛、鳳笙、箏の三種の繊細な楽器の調べを調和させていた。

一、懇親会アトラクション当日

（研修大会第一日目）

七月二十五日午前十一時、久遠時の大本堂にて受付が始まった。第一日目の日程は、受付の後、御経頂戴・開会式を行い、諸堂参拝に続いて大学講堂にて望月真澄教授の記念講演が行われた。学生のアトラクションが行われる懇親会は、下部ホテルにて午後七時から開始された。学生の集合時間は、アトラクションのリハーサルのために会場となる下部ホテルに午後四時とした。五名の学生は午前中から、身延駅周辺と久遠寺大本堂前において誘導のボランティアを申し出てくれていた。身延駅での誘導係りの学生は、前日までの長雨によって列車の到着時間が遅れるというアクシデントにもめげず、また大本堂前誘導係の学生は炎天下の中、二五〇名の参加者を笑顔で出迎えた。

午後三時三十分、望月真澄教授の記念講演「身延山の

「歴史と信仰」へ未練を残しながらも学生の集合する下部ホテルへ車を急がせた。

① リハーサルの様子

学生の控え室として、広々とした和室が用意された。

この日のためのお揃いのＴシャツは、襟元、色合い、重ね着の仕方など、四十五人がそれぞれに個性を出した着こなしがされていた。修学旅行の気分さながら、明るい表情で学生たちは部屋の障子を開けて入って来た。雅楽の学生の最高位の衣装の美しさに、集まった学生たちはさらに気分を高揚させた様子であった。談笑する間もなく、リハーサルのために会場へ移動した。

懇親会の会場となるグランドホール・スターライトにはすでに部屋いっばいに六列のテーブルが並べられ、二五〇名を迎える用意がされつつあった。アトラクションとして演じられる雅楽、佐治さんの紙芝居、手話ソングのための演出は、望月法人事務局長を中心に、池上教授、

間宮教授（大学事務局長）、富山講師、望月講師がその場でアイディアを出し合って話し合われた。またタイムスケジュールの最終確認も短時間で行われた。

雅楽は、その神秘的な調べに会場の人々が驚きをもって耳を傾けられるように口上は入れないことにし、ステージ幕内にて会場のざわめきの中に流れ込むように演奏を始め、幕が上がりスポットライトに照らされた三名の学生がステージの上に現れるという演出に決めた。

佐治さんの紙芝居は、席がステージから離れた方にも十分見ていただくために事前に宇佐美さんがパワーポイントに取り込み、スクリーンに映写されるばかりになっていた。佐治さんがステージ上右脇で紙芝居を読み語り、さらに正面の大画面に紙芝居が映し出されることになる。この場では、映写場面が遅れないようにパソコン操作のタイミングの確認が入念に行われた。また紙芝居の上演と手話ソングのために楽譜をおこし、上演中にBGMを演奏してくださる富山講師とは、音量、速度、高さ、曲

目の調整・確認が行われた。

四十五名の学生が臨む手話ソングでは、入・退場の仕方、立ち位置、ギター伴奏者とボーカル担当者の配置について、学生の一人一人がそれぞれの場所で主役となって表現できるように配慮した演出を考えた。ステージ反対側の扉から、各学年背の高い順に二列でステージに向かって自信を持って入場する。手話ソング披露の際はステージ上に三十名が登壇し、互い違いに二列になる。ステージ下には一列十名の配置とした。さらに、来場者をリードして手話ソングを一緒に歌う際には、学生が参加者の近くに移動することにした。望月講師がステージ上で手話の解説を始めると同時に学生は速やかに六列のテーブルの両側に移動し、なるべく参加者の至近距離に立つようにした。学生銘々が、望月講師の手話の解説と一緒に近くの参加者に手話のやり方を伝えるためである。参加者と学生が目と手で交流しながら一緒に手話ソングを歌い、歌の後半スキヤットの箇所を再びステージ上に四

十五名全員が登壇して暗転するという構成にし、二、三度リハーサルを繰り返した。

② 本番

学生たちは控え室で、用意された夕食を済ませ出番を待った。午後七時には計画どおり懇親会が開始され、雅楽は七時四十五分、紙芝居八時、手話ソングは八時二十分の進行予定であった。学科全員が大学構外で一同に会す機会は初めてである。時間まで自由にトランプやゲームを楽しむグループ、ギターを囲んで歌を口ずさむグループ、話に興じるグループなど学年を越えて交わり、学内では体験することのできない時間を楽しんだ。

一足先に、雅楽のメンバーが本番に向かった。曲目は「老越調 賀殿急」「平調 越殿楽」「陪臚」の三曲である。和楽器の音色が静かに鳴り渡った会場では予想通り、それまでのざわめきが一瞬にして消え、来場者は身延の歴史の重なりを直に感じているかのように舞台上に釘付け



写真3 雅楽の演奏

になっていた。

七時三十分、手話ソングのメンバーがいよいよ会場下でスタンバイする。女子学生からは、「緊張してきた」という声が聞こえ、歌詞を確認しつつ手話を復習する姿が見られた。嬉しそうにニコニコしている顔もあった。

閉じられた扉からは、佐治さんの熱演が溢れ出るように伝わってきていた。そのためか、学生の表情は次第に硬くなり、自分が手話ソングを披露するだけでなく、二五〇人も来場者の手話をリードしなければならないという使命感が表情に表れていた。

「堂々と入場し、自信を持って人前で自分の表現を行い、さらにその表現が多くの人に受け入れられるという経験をして来て欲しい」と学生に伝え、入場する学生たちの背中を見送った。

紙芝居の感動の余韻が残る中、四年生二名による手話ソングの紹介が行われた。この手話ソングを演じる意味、手話ソングに込めた想いは以下のように語られた。

これから皆様にお聞きいただきます手話ソングは、「広島県の少女の折鶴」という歌です。

この歌は、これまでご覧いただいた「貞子と千羽鶴」の紙芝居の主人公である佐々木貞子さんを想って、モンゴルでうたわれている歌です。

日蓮宗の願いは、世界平和を実現することだと学びました。広島・長崎の悲劇を繰り返さないという僕たちの決意と同時に、次回日蓮宗保育連盟研修身



写真4、5 手話ソングの発表

会の開催県である広島県にエールを送り、この「広島県の少女の折鶴」を仏教福祉学科で学ぶ学生全員で歌います。

この想いを学生全員が再度共有し、会場の中心を前進してステージに登壇した。手話ソングを歌う学生の視線は、しっかりと来場者へ向けられていた。

この後、学生は参加者の席の間に移動し手話ソングをリードした。用意された時間は短く言葉こそ交わすことはなかったが、歌声とともに目と手と心を精一杯使った自信溢れるリードであった。

共に手話ソングを歌いながら来場者と笑顔で交し合った学生たちは、自分自身の表現が受け入れられたと確信したに違いない。



写真6 達成感に溢れる仏教福祉学科の学生